

春日神社「由緒略記」の成立に関する一考察 ー長政神格化の認識をめぐってー

はじめに

今回の報告では、近世の藩主と寺社（ここでは神社）との関係の一端を神社の由緒を通してみていく。

福岡藩では、初代藩主長政が六代藩主黒田継高により明和五（一七六八）年四月、神号「武威円徳聖照権現」として、神霊が城内に安置され神格化された。

しかし、この長政の神格化以前に長政の霊を祀ったとするのが、春日神社の黒田大明神を祀る黒田宮で、それは国祖祭として祀られたとする。その由緒は神職波多野家に多く存在する。しかし、藩により認められたのは天明三年（一七八三）であった。

今回、それら由緒の一つで、天保六年六月二十八日、春日神社三代大宮司波多野陸奥守常成によって記された「黒崎駅宗社春日宮国祖黒田宮御由緒略記」（以下「由緒略記」と略称する）を取り上げ、この「由緒略記」が書かれた当時の筑前領内の特有の背景と藩主との関係、そして、長政の神格化を結び付けた由緒書の主張を検討する。それは、近世大名（領主）と寺社の関係の一端を明らかにすることになり、神社由緒の新たな位置付けにも繋がると考える。

1. 「由緒略記」による春日神社での黒田大明神鎮座由来の二つの説
2. 史料「由緒略記」の内容分析
3. 藩主（斉隆・斉清）と春日神社（黒田宮）の関係
4. 春日神社と秋月藩
5. 春日神社波多野氏の藩への嘆願
6. 長政を祀る国祖祭について

おわりに

何故、この「黒崎駅宗社春日宮国祖黒田宮御由緒略記」は書かれたのか、また、春日神社（波多野家）の意図とは何か、次の二点からみていく。

[藩側からの要請]と考えた場合

[波多野家の自主的な意図]と考えた場合

今回取り上げた「黒崎駅宗社春日宮国祖黒田宮御由緒略記」は、藩から何らかの要請があったかもしれないが、それは、寺社差出のような公的な要請ではなかった。

藩と神社の関係において、この由緒書は、表面的には近世中後期経済的に窮乏する藩の寺社外護体制の中で、初代藩主を神格化し祀っているという自社の由緒を現藩主（藩）に誇示することによって自社への外護要請の主張を行い、内面的には後継者及び氏子に対する神社存続の一つの手段として書かれたものではないかと考えられる。